

通し番号	4422
------	------

分類番号	21-24-12-04
------	-------------

(成果情報名) 冬まきトンネル栽培による5月どり寒玉系キャベツの収穫期の前進化
[要約] 加工業務向けキャベツの端境期となっている4～5月どりについて、寒玉系品種を冬まきトンネル栽培すると、露地5月どり作型での収穫期より2～3週間程度前進できる。
(実施機関・部名) 神奈川県農業技術センター・野菜作物研究部 連絡先0463-58-0333

#### [背景・ねらい]

加工業務用適性の高い寒玉系キャベツの4～5月どりは、抽だいや不結球等によって生産が安定しない。とくに4月下旬から5月上旬にかけては生産が極めて難しく、端境期となっている。そこで、この時期に安定して収穫可能な新作型を開発するため、冬まきトンネル栽培により、5月どり寒玉系キャベツの収穫期の前進化を試みる。

#### [成果の内容・特徴]

- 1 12月上旬播種から2月上旬播種で加温育苗（最低温度13℃）し、1月下旬から3月中旬定植作型において、定植直後からトンネル被覆すると、露地栽培に比べて収穫期が2～3週間前進し、4月下旬から収穫できる。従って、両栽培方法を組み合わせると、4月下旬から5月末まで連続して収穫することができる（図1）。
- 2 同一結球重の個体について、両栽培方法で比較すると、トンネル栽培した場合には結球がやや緩く、芯が若干細長くなるが、それ以外の特性に差は認められない（表1）。
- 3 トンネル被覆によりトンネル内昼温は顕著に上昇し、晴天時には日中の地温は8℃、気温は10℃高くなる。そのため、3月末までの日平均地温及び気温は露地栽培に比べ、いずれも約3℃高くなる（図2）。

#### [成果の活用面・留意点]

- 1 標準的な栽植密度は、畝幅×株間＝60×35cmとし、2条ずつトンネル被覆する。
- 2 育苗には72穴セルトレイを用い、定植直前まで最低夜温13℃で管理する。
- 3 トンネル被覆には換気口を有する資材（ユーラックカンキ2号など）を使用する。
- 4 本成果は早生品種の‘さつき王’を用いた結果である。‘さつき女王’など他の5月どり用品種も利用できるが、収穫期は5～10日程度遅くなる。
- 5 5月どり作型は収穫適期が1週間程度と短いため、収穫が遅れないように注意する。

[具体的データ]

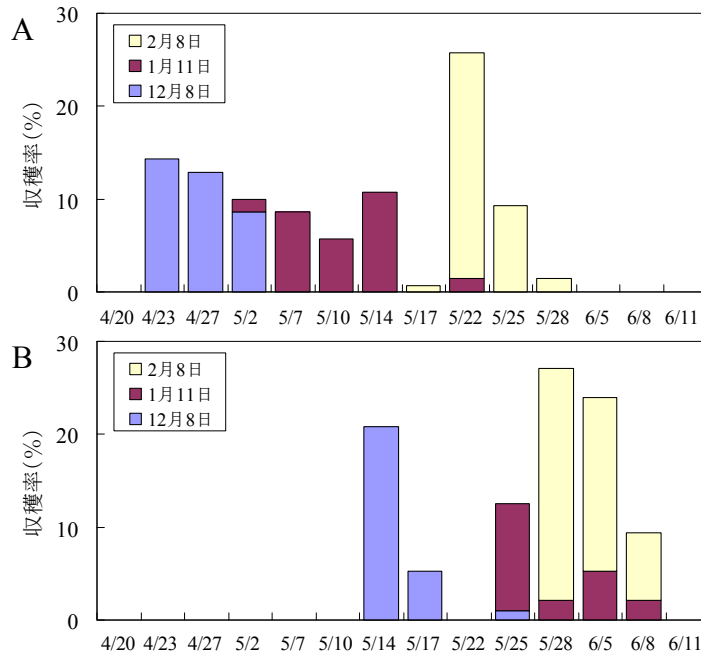


図1 冬まきで寒玉系キャベツ品種‘さつき王’をトンネル (A) 及び露地 (B) 栽培したときの播種日別の収穫率の時期別変化  
 播種日：2006/12/8、2007/1/11、2/8、定植日：2007/1/24、2/16、3/15、トンネル資材：ユーラックカンキ2号、育苗：72穴セルトレイを用いて最低夜温13℃で管理

表1 栽培方法の違いが寒玉系キャベツ‘さつき王’の特性に及ぼす影響<sup>z</sup>

栽培方法	結球重 (g)	球高 (cm)	球径 (cm)	球形指数 <sup>y</sup>	結球緊度 <sup>x</sup>	芯長 (cm)	芯重 (g)	芯長/球高	芯割合 <sup>w</sup>
トンネル	1,446	12.7	20.0	0.64	0.55	7.9	80	0.62	5.5
露地	1,516	12.3	20.1	0.61	0.58	7.2	83	0.58	5.5
有意差 <sup>v</sup>	ns	ns	ns	ns	**	**	ns	**	ns

<sup>z</sup>: トンネルは2007/4/23, 5/7, 5/22、露地は同5/14, 5/25, 6/5にそれぞれ10個体を抽出し、計30個体調査した平均値、<sup>y</sup>: 球高/球径、<sup>x</sup>: 結球重/( $\pi/6 \times$ 球高 $\times$ 球径 $\times$ 球径)、<sup>w</sup>: 芯重/結球重 $\times 100$ 、<sup>v</sup>: t-test, \*\*:1%水準で有意、ns:有意差なし

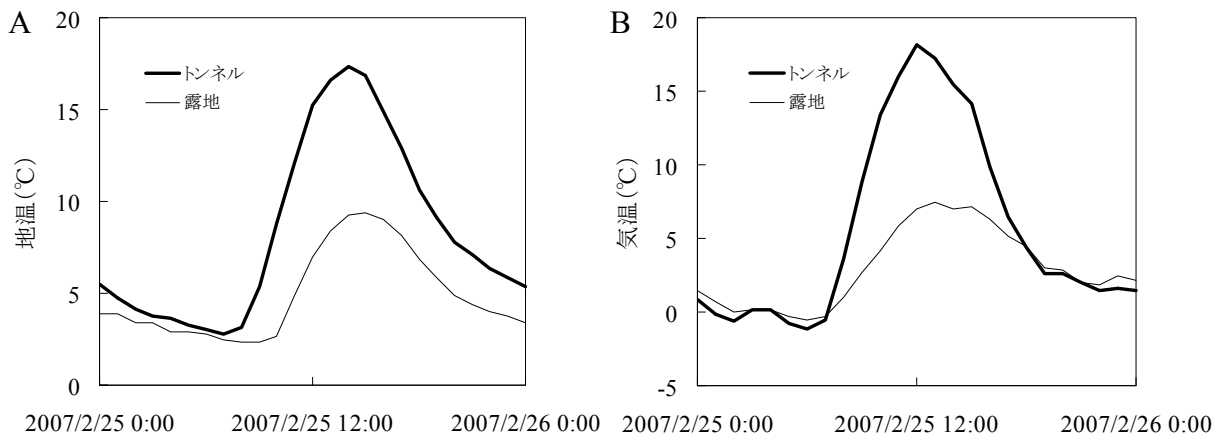


図2 晴天日のトンネル内及び露地の地温及び気温変化  
 A：地温（地下部5cm）、B：気温（地上部10cm）

[資料名]平成19年度試験研究成績書（野菜）

[研究課題名]業務用春キャベツの品種・栽培技術及び作型開発

[研究期間]平成18～22年度

[研究者担当名]太田和宏・高田敦之（三浦半島地区事務所）・北浦健生・北宜裕